

# Browning 夫妻が互に捧げ合った 愛の言葉

渡 邊 清 子

英文学史上 Robert Browning (1812-1889) と Elizabeth Barrett Browning (1806-61) 夫妻程、文字通りに霊肉一致の深い愛情を、生涯かけて死に至るまで持ち続け、燃やし、歌い続けた詩人達の類を見ないと言っても過言ではあるまい。この小論文に於いて詩人夫妻の熱烈な愛の体験を2人が交した手紙や詩によってたどってみたい。

Browning は1833年、21歳の時に *Pauline* を手初めとし、1835年に *Paracelsus* を、1837年に *Strafford* を、1840年に *Sordello* を、その翌年には詩集 *Bells and Pomegranates* (「鈴と柘榴」) No. I を、その次の年にそのNo. II とNo. III を、43年にNo. IV とNo. V、44年にNo. VI、45年にはNo. VII、46年にNo. VIII という風に実に精力的に作品を出版しつづけた。「鈴と柘榴」という8冊の小冊子には後世に名を残す優れた短詩が多く収められているが、それ以前の劇詩には登場人物の心理描写に重点が置かれ、事件や行動の劇的発展や展開に乏しかったため、実際に上演するのは殆んど不可能で不評に終わった。その上、当詩人として令名を馳せていたテニソンのような流麗柔軟な言葉使いと対照的に、哲学的な人生観を折り込んだ難解な表現を駆使し、冗漫に陥る欠点をもっていた。それで彼の詩は余り読まれず、評判もよくなかった。しかし落胆して1844年の末にイタリアから帰って来た彼は、既に多くの著作をなし、文壇にその名を知られていた Miss Barrett の *Poems* (1844) を読み大いに力づけられた。彼女はもう彼の詩集を熟知していたと見え、“Lady Geraldine’s Courtship” (St. XLI, 11. 163-4)

という詩の中で彼女は Browning をテニソンやワーズワス等一流の詩人達と同等に並べ、彼の詩をよく理解し、賞賛していたからである。彼自身も既に John Kenyon を通して Miss Barrett の詩を以前から愛読していたので深い感動をおぼえたのは当然であろう。彼は友人 Kenyon のすすめに従い、1845年1月10日に初めて Barrett 嬢に熱烈な感謝と感激の手紙を書き送った。このことが二人の優れた詩人達を永遠に結ぶ、目に見えない鎖となったのである。

Browning は “I love your verses with all my heart, dear Miss Barrett —, and this is no off-hand complimentary letter that I shall write, —” という名文句で書きはじめ、終りの方で “I do, as I say, love these books with all my heart — and I love you too”。<sup>(1)</sup>と彼は実に大胆率直に彼の彼女に対する愛を告白している。それに対して Miss Barrett から早速返事が来た。“I thank you, dear Mr. Browning, from the bottom of my heart. You meant to give me pleasure by your letter — and even if the object had not been answered, I ought still to thank you。”<sup>(2)</sup>手紙はかなり長い複雑な内容のものであったが、彼女も又熱情を込めて彼の詩に対する愛と敬意をもち続けることを述べて、次の如く手紙を結んでいる。

“... I will say that while I live to follow this divine art of poetry, in proportion to my love for it and my devotion to it, I must be a devout admirer and student of your works. This is in my heart to say to you — and I say it. And, for the rest, I am proud to remain

Your obliged and faithful

Elizabeth B. Barrett.”<sup>(3)</sup>

2人の記念すべき愛の手紙の交換されたのは Browning が32歳、Elizabeth が38歳の時のことであった。その後繁く彼らの間に恋文の交換が行われ、一週に2、3度逢うようになってからも結婚に至るまで続けられた。その総数実に600通にのぼると V.E Stack は証言している。<sup>(4)</sup> Browning は1845年2月26日

に彼女に次のような手紙を書いた。“Real warm Spring, dear Miss Barrett, and the birds know it; and in Spring I shall see you, surely see you — for when did I once fail to get whatever I had set my heart upon?”<sup>(5)</sup>この強引とも見える程の Barrett 嬢との面会の願望は、終に報いられ、彼が初めてかの有名な 50 Wimpole St. の彼女の病室を訪れることが許されたのは、その年の 5 月 20 日のことであった。

Elizabeth は小柄ではあったが、15 歳の時落馬して背椎を傷めるまで、人並の健康な少女であった。しかしそれ以来彼女は一生歩行が困難になり、部屋に籠る病弱な身になってしまっていた。その上 1828 年に母を亡くし、1840 年の夏に最愛なる弟に溺死されてからの彼女の悲歎は目に余るものがあった。彼女は不眠症に悩まされ、半病人の状態になった。しかし彼女を溺愛する父親や多くの弟妹に優しくかじづかれ、徐々に少しずつ元気を回復し 1844 年には 2 巻の *Poems* を刊行する程になっていたのであった。それでも Browning はこの閨秀詩人に初めて会った時、彼女の健康状態をみて、とっさにある決意をした。その事情を Griffin と Minchin は次のように伝えている。“Though he supposed, when first he saw her, that she would never be able so much as to stand upon her feet before him, he determined to devote his life to hers. The letter which he wrote after their first meeting — the only one afterwards destroyed — was virtually the confession of a love which Miss Barrett did not then believe that it could be right for her to accept.”<sup>(6)</sup>つまり彼は病弱な彼女のため生涯の伴侶となろうと決心し、彼女に熱情あふれる結婚の申し込みの手紙を送ったのだった。<sup>(7)</sup>しかし Elizabeth はそれを受け入れる程の身の上知らずではなかった。Browning より 6 つ年長の 39 歳で、もはや彼女は自他共に朽ち果てるのを待つばかり、と信じられていたので、正に天から降って湧いたような話であった。元気旺盛な前途洋々たる天才詩人にとって彼女は重荷にこそなれ、何の役にも立たないことは火をみるより明らかであった。彼女はその翌夕、彼に次のような驚きと悲しみの文を送った。

“I intended to write to you last night and this morning, and could not,— you do not know what pain you give me in speaking so wildly.... You have said some intemperate things. . fancies, — which you will not say over again,... and which (so) will die out between *you and me alone*, like a misprint between you and the printer.”<sup>(8)</sup>彼女は Browning が一時の激情にかられて書いた手紙として、その申し込みを破棄してほしいと願う。しかしこの事があってから一層二人の友情は深まり逢瀬も繁くなって行った。赤い灯を点ぜられた Elizabeth の灰色の世界は日増しに明るさを取り戻し、彼女は勇気づけられるまゝに、7月頃には少しずつ歩行する練習も出来、馬車に乗って外出することも可能になって来た。10月2日の手紙を Browning は “ ‘ Let me kiss your hand — dearest! My heart and life— all is yours, and forever— God make you happy as I am through you— Bless you. ’ ”<sup>(9)</sup>という高貴な純愛の言葉で終っている。Elizabeth は彼の愛の言葉に触れる毎に、少女のように有頂天になったが、その度に彼女はそれを受けるにふさわしくない、と自らを厳しく省みて苦悩するが、ずるずると惹かれて行く。例えば彼女は色々な点で彼に対し自己卑下に陥るが、Ward によれば彼と彼女の知的教養の深さにおいては、あまり差がない程に、彼女はギリシャ・ラテン・イタリア語、フランス語、英語の古典に精通していた。それで互にそれらの詩行を引用しながら対等に語り合ったということである。<sup>(10)</sup>それでも彼女が Browning の結婚の申し込みに応じるまで計り知れぬ心情の屈折に悩まされたことは、次にあげる彼女の sonnet 集によって明らかにされる。

二人が結婚してから後の1847年のある春の朝、恥じらいながら夫人は夫のポケットの中に結婚前に彼女が書き溜めていた sonnet 44篇を突っ込んで逃げ去ったという。夫はそれを見て、シェイクスピア以来の優れた作品集だと激賞し、その公表をすゝめた。それが現在我らがみる有名な「ポルトガル語からのソネット集」(*Sonnets From The Portuguese*)<sup>(11)</sup>である。彼女はこの詩集の中で

Browning と相知ってから愛の逃避行決行までの苦悩、歓喜、逡巡、熟慮、心の乱れ等を率直に告白記録している。しかしその主なるテーマは一貫して「死よりの復活」というので、Robert の求愛に答えるものである。この詩集には感傷に流される点が多々あるが、古典的な高い知性と繊細な感性に充ちたものとして文壇に高く評価されている。

以上にのべた詩集の中で特に有名なものに焦点を絞り、作者の Robert に対する愛の調べに耳を傾けてみよう。第一の詩は Robert の求愛により目覚めた希望を暗示している。病弱な身をかこち、死の恐怖におのゝく彼女の背後に忍び寄り寄る神秘的な影があって、あなたを捉えているのは「死」でなく「愛」だと銀鈴の声が告げてくれたと彼女はいう。“... a mystic Shape did move / Behind me, and drew me backward by the hair, / And a voice said in mastery while I strove, .. / ‘Guess now who holds thee?’ — ‘Death,’ I said. But, there, / The silver answer rang.. ‘Not Death, but Love.’ (No.1) つまりその銀鈴の声こそは Robert の力強い励まし声に外ならない。No.2～4の詩は二人の身分上の格差への逡巡、5と6では彼の愛を拒みつつもそれを受けたい希望を、7では死の淵に落ち込もうとしていた自分は救世主の如き彼の愛により引きあげられ、世界が一変してしまった喜びを述べている。“The face of all the world is changed”と。かの有名なNo.14の詩では彼女の虚弱さ故に彼女を憐れみ愛すことのなきように、「愛故にのみ愛して下さい。」と愛の本質に迫る。“If thou must love me, let it be for nought / Except for love’s sake only.”) 16番目の詩では今までのように Robert を愛しつつも避けようとするのを止めて、積極的に彼の愛によって自らを高めて行きたいと謙虚になる。“Here ends my strife. If *thou* invite me forth, / I rise above abasement at the word. / Make thy love larger to enlarge my worth.”) そして彼の愛により死から生へと甦った彼女は、愛の印として髪の毛一ふさを彼にのみ与えるという。いかにも女性らしい彼女の一面を覗き見る気がする。“I never gave a lock of hair away / To a man,

Dearest, except this to thee.” No.18.) 詩篇20と21により彼女はもし Robert の愛がなかったら、春の訪れを見なかったであろうと感謝を述べ、22番で愛の賛歌を歌いあげている。それから Robert に対する絶対の信頼の情を “I lean upon thee, Dear, without alarm, / And feel as safe as guarded by a charm / Against the stab of worldlings,” (No.24) とのべる。つまり彼と共にあれば、神と共にある如く2人にはいかなる世間の災いも、及ぶことはないと思安をおぼえている。彼女は折に触れ Robert との出合いの重大さを思い (詩20)、彼からの愛にみちた便りのことを回想し (詩26) 感無量になったりしたが、詩35の場合のようにやさしい彼女も、熱烈に Robert の愛を確かめようとする次のような詩も書いた。「もし私があなたのために凡てを棄てるなら、あなたは私の代りに私の凡てになって下さいますか」と。(“If I leave all for thee, wilt thou exchange / And be all to me?”) ともあれ夫人は Robert から貰った溢れるばかりの愛の言葉に感謝を捧げ、幸いを詩集の終りまで綴り続けたが、43番の詩には特に「死んで後までもなおあなたを一層愛し続けます。」と限りなき愛の言葉を高らかに献じている。(“I shall but love thee better after death”) と。

この詩集にあらわれているように Elizabeth が Robert との文通に夢中になり、彼の来訪が繁くなるのをみて、心良く思わなかったのは彼女の父親であった。早く母親を亡くし、11人の弟妹の頭である詩人 Elizabeth は父に取っては掌中の玉であり、誇りであった。厳格で独断的で専横な父親は子供達の結婚を許さなかった。ましてや半病人の娘は自分の膝下に置いて、看病するのが義務だと心得ていた父親は、その結婚を許す筈がなかった。しかし Browning は彼女をイタリーに転地させねば健康の回復はないと確信し、彼女の体力の限界に望みを托し、結婚して新天地を求めることを彼女にすゝめた。Elizabeth も彼の申し出を受諾し、父の猛反対にもめげず、2人は密かに1846年9月に教会で結婚した。時に Robert は34歳 Elizabeth は40歳であった。それから1週間後、彼女は女中と愛犬 Flush を連れて夫と共にフランスを経由、イタリアの Pisa へと逃避を決行した。このことが当時の文壇の大話題になったことはいうまで

もない。1847年4月に Florence の Casa Guidi に彼らは居を移した。そこで奇蹟的に2年後の3月に夫人は玉のような男の子を出産した。それから1861年6月29日に夫人が夫の腕に抱かれて静かに息を引き取るまで、幸福な愛の巣がここで営まれたのであった。

結婚を前後にして、夫妻が揃って次々と精力的に作品を公にしたことは良く知られている。Robert は1845年に「鈴と柘榴No.Ⅶ」及び「劇的ロマンスと抒情詩」(*Dramatic Romances and Lyrics*) を、翌年には「鈴と柘榴No.Ⅷ」と *Luria and A Soul's Tragedy* を出版した。1850年に *Christmas - Eve and Easter - Day*, それから遅れて1855年に彼の名を不滅なものにした *Men and Women* (「男と女」) Vol. I 及び Vol. II を世に問うた。Elizabeth の方も1851年に *Casa Guidi Windows, A Poem* を出した。

Browning は夫人が *Aurora Leigh* を執筆中のところを伴って、イタリーからロンドンに1時帰国した。彼はこの時、上記の「男と女」に含まれる筈の50篇の中の49篇を携え来り、残りの1篇はロンドンで書きあげた。この詩集のエピログとして愛妻へ“*One Word More*”と題される詩が献ぜられ、合計51篇となった。Browning には優れた愛の詩が沢山あるが、この詩集に含まれている以下3篇の詩、“*My Star*”, “*By The Fire-Side,*”と“*One Word More*”は他の詩と異なり、詩人自身が愛妻に対する個人的な愛情を、なまのままに正直に披歴したものであるとの定評がある。それで順を追ってこれ等3篇にもられた愛の言葉をさぐってみたいと思う。批評家によって異論はあるが E. Berdoe 等は“*My Star*”は Browning の妻に対する“tribute”つまり感謝と賛辞であると証している。<sup>12)</sup>以下がその詩である。

### My Star

All that I know  
Of a certain star  
Is, it can throw

(Like the angled spar)

Now a dart of red,

Now a dart of blue;

Till my friends have said

They would fain see, too,

My star that dartles the red and the blue!

Then it stops like a bird; like a flower, hangs furled:

They must solace themselves with the Saturn above it.

What matter to me if their star is a world?

Mine has opened its soul to me; therefore I love it. (13)

Browning は空に輝く 1 つの星を妻に例える。私はその光沢ある宝玉石が時には青い輝きを、時には赤い輝きを、投げることだけしかそれについて知らない。(青は清純な魂、赤は清き愛の象徴) だが自分の友人達は好奇心をもって、そのきらめく星をみたいという。するとその星は小鳥の如く黙してとまり、1 輪の花の如くすぼんで垂れ下がってしまう、と書いている。Browning が妻のこのいじらしい謙虚さと慎しみ深さをいかにめで愛したことか。妻の死後彼の書いた壮大な長篇詩 *Th Ring And The Book* の中でも彼女のことを “half angel and half bird” (14) と賛えていることからそれが了解出来る。「我が星」が人々に対しその輝きを見せず、面を背けるのであれば仕方がないから彼らは土星でも眺めるより外はない。彼らが自分達の土星が世界そのもののように素晴らしく壮麗なものであると、誇ろうとも少しも羨ましくはない。なぜなら我が星は私に心を開いてくれたから、それ故に私はそれを愛す。」と詩人は胸を張って、妻が自分に愛を傾けてくれていることを確信し、無上の幸福感に侵って、このように宣言するのである。Browning はこの詩を通して、人の真の価値は愛する者によってのみ理解されるのだ、と知っているのではあるまいか。人から何か 1 筆書いて欲しいと頼まれると、彼はよくこの詩を書いて与えた程、気に入っていたといわれる。



抒情味あふれる“By the Fire-side”「炉辺にて」は細やかな夫婦愛についての偽らざる詩人の告白で、妻に直接捧げた数少ない個人的な愛の詩の1つであると言っても差し支えない。H. C. Duffin が指摘しているように Browning は40歳になるまで愛を称える詩人の範疇に入っていなかったが、Elizabethを知って誠の‘love poet’となった、といえると思う。Duffin は“By the Fire-side”のことを“I will make bold to call the greatest love poem in the English language”<sup>99</sup>とほめすぎる程絶賛をおしまない。此の詩は各連5行、53連からなっている。Duffin はこれをベートーベンのA minor string quartetsのように5つの部門に分けて説明しているが、筆者もそれに従って考察をすすめて行きたい。

第一部はIからVI連までで、この詩の語り手である Browning が今中老の境にいて、静かに愛妻に話しかけているところから始まる。これから先、長い冷たい11月のような老年が訪れて来た時、一体彼は何をしているだろうかと未来に想像を馳せる。おそらく彼は妻と一緒に炉辺に腰を下ろし、冷たい横なぐりに吹く風が鎧戸を叩く音を聞きながら、子供たちが遊びに抜け出してしまった後、老齢にふさわしいギリシア語で書かれた“great wise book”に読み耽っているだろうと思う。彼は本を読んでいる振りをしているが、いつの間にか遠い追憶の世界に段々と吸い込まれて行く。その Browning の様子を A. Hind は次の様に説明する。“With his mind in this vagrant condition one thing suggests another, until there is a whole network of ideas interlacing each other like the boughs of trees, and he seems to be looking down a long avenue of thoughts to the distant vista at the end.”<sup>100</sup>そうすると彼は全く何の束縛も受けずに自由に若き日の、又はイタリーの、追憶に耽ることが出来るのであった。

次の第二部はVII~XX連より成る。ここから詩人は想像を駆使して、彼を愛し、祝してくれた Elizabeth が彼の妻になる約束をしてくれた過去のことを回想する。しかしその時の実際の場所は、London の50 Wimpole St. であっ

たが、彼はこの詩では別な所を設定している。つまりそれは1853年9月に幼い  
 独り息子を連れて、妻や友人達と共に、彼らが住んでいた Florence の近く  
 ある Prato Fiorito に遠足に行つて見た素晴らしい感動的な場所であった。<sup>(17)</sup>  
 彼が設定したこの愛のいとなみの場所を回想の中に振り込み、かつて妻と歩き  
 ながらみた青空を背景に聳り立つ白雪をいたづいたアルプスの岩壁を思い出  
 す。その溪谷に沿って森の中を共に歩いた感激がよみがえる。“Look at the  
 ruined chapel again, / Half-way up in the Alpine gorge!” (ST. VII) <sup>(18)</sup>と妻  
 に注意を促したり、薄暗い森が2人を取り囲み、すっぽり包み込んでしまつた  
 所に立った時、2人は万象の中心に立っているような気持ちにさせられたりし  
 たことを思い出す。“A turn, and we stand in the hearts of things; / The woods are  
 round us, heaped and dim;” ST. VIII.) 細い糸のようにしたたり落ちる流れ、黄  
 色く咲き揃った美しい山の花、足下に showers の如く降ってくるいが栗、正  
 に11月の風物である。礼拝堂や炭焼小屋 (charcoal-burners' huts), 小鳥の囀り、  
 すべてが2人の歩いた昔のままである。山や森や溪谷のたたずまいの細かい見  
 事な描写に読者は感心しながら引き込まれて行きそうになるが、ここで作者の  
 真昼の夢はさめる。

第三部は XXI~XXX 連までである。回想が破れて現実に引きもどされた詩  
 人は冒頭から

My perfect wife, my Leonor,  
 Oh heart, my own, oh eyes, mine too,  
 Whom else could I dare look backward for,  
 With whom beside should I dare pursue  
 The path grey heads abhor? (ST. XXI)

と、「申し分なき我が妻」に結婚期の彼の愛情を調べ高こうたう。「あなた以外  
 の誰と私は過去をなつかしみ、振り返ってみることが出来ようか。老いたる者  
 達が避けようとする道を、あなた以外の誰と一緒に辿ろうか」と。なぜなら若  
 き日に辿った道には花が咲き乱れ匂っていたが、もはや今は過去の青春はない

からだ。しかし Browning は過去の追憶の中に思い残し、悔いることは何もない。一番なつかしく思い続けているのは、愛妻のことである。その愛妻が現実  
に彼の目の前に妖精のように小さい手で広い額を支えて坐っている。(“ Reading  
by firelight, that great brow / And the spirit—small hand propping it, ) St. XXIII.  
彼は全く感謝にたえない。人は青春を花に例え、老年を荒野に例える。しかし  
彼には最高の愛妻が今なお与えられている。その至福を思えば失なわれた青春  
等はものの数ではない (St. XXV 参照) と彼はいう。A. Hind はこの連につき  
次の如くコメントしている。“Seldom has any man paid to his wife a higher  
compliment than this—”<sup>19)</sup>更に Browning は次のように 2 人が 1 体となって  
過す幸を力強こうたう。「最初に我々 2 人の魂が霧のように触れ合い、交り合っ  
たのは深い意味のあることだったが、今は 1 つに溶け合い、吸収し合い、1 体  
となって流れ続けている。どのような岩が阻もうと。」と。

My own, see where the years conduct !

At first, 'twas something our two souls

Should mix as mists do; each is sucked

In each now: on, the new stream rolls,

Whatever rocks obstruct. (St. XXVI)

次に詩人は雄大な image を用いて、迫り来る老年の将来については、自信  
をもって、夫人と共に 1 つになった 2 人の魂が、あつき心で神の恩寵を信じ、  
神の健てたまひし御国に、霊体を与えられて入る日のあることに、希望と期待  
を寄せている。

Think, when our one soul understands

The great Word which makes all things new,

When earth breaks up and heaven expands,

How will the change strike me and you

In the house not made with hands? (St. XXVII)

そして夫人が彼より 1 歩先に天上界の神秘を悟り、彼の魂を導いてくれるこ

とを期待する (St. XXVIII)。それから St. XXX に至ると彼は妻に、もう 1 度一緒に最初の出だしに立ち帰り、新鮮な恋をもう一度繰返そうと妻に提言する。

Come back with me to the first of all,

Let us lean and love it over again, (St. XXX)

すでに初老の坂を登りつつも、再び若き血潮を愛妻と共に初心に戻って湧かせてみようという Browning は、何と雄々しく澆刺としていることか。1863 年に出た “Rabbi Ben Ezra” の初めに彼は

Grow old along with me!

The best is yet to be,

The last of life, for which the first was made:

Our times are in His hand

Who saith “ A whole I planned,

“ Youth shows but half; trust God: see all nor be afraid! ”<sup>(20)</sup>

と剛健な魂の歌声をあげたが、その火種はここにすでに置かれてあったのか、と頷かれる。

XXX 連までは 2 人の個人的な経験を描いているが第四部 XXXI~XLVIII 連は結婚前の恋愛の思い出に再び立ちかえり、事実と幻想が交差しつつ語られて行く。彼等の愛が育くまかれたのは実際は Wimpole St. であったが、前述の第二部で彼が設定した Bagni di Lucca の辺りに場面を移し回想を展開する。Browning と Elizabeth が沈黙のうちに歩いて来た道には小鳥が囁り、道にはさまよった鹿が池の水を飲みに来ていた。自然はいつもの営みを続けながら相寄る 2 つの魂の行方を見抜いていたが一切黙して語らなかった。彼らがあちこち歩いているうちに夕方となり、沈黙が辺りを色濃く閉ざし、2 人の間に神秘的な緊張が静かに流れた (St. XXXII)。両人は肩を並べ、腕と腕を組み合わせ、頬と頬と寄せて歩いて行く間中、彼はあれこれと自問自答しつつ、自分の胸中をどう打ち明けようかと心穏やかでなかった。(St. XXXIII)。それでも 2 人は黙したまま壊れた橋を渡り、美しい教会の寂れたのを惜しみ、壁畫の色褪せた

のに心を傷め、略奪をおそれてか、十字架も祭壇も空っぽになっている中を覗き込んだりした。入口の粗末な扉には亡き建築者の名がきざまれていた。そこまで来て二人は先刻来た道に引き返そうとした、その時、

“Oh moment, one and infinite!” St. XXXVII. 1. 181

「ああ、1瞬にして無限の時間よ！」

これが2人の上に訪れた。谷川の細き流れは木株や石の上を滑り、西空は薄明るく宵闇が迫って来ていた。すると忽ち空は灰色に変わってしまい、貴橄欖石のような星が1つ輝き始めた。H. C. Duffin は Browning は2人の恋人のピンと張りつめた高潮した心に、宇宙の大精神は無関心ではいられなく、2人のために同情を寄せ、行動を起してくれると考えているのだと、いう。そして更に“... in *By The Fire-side*, speaking of a relation between himself and Elizabeth, and a relation between the powers of nature and humanity, in moments of tension, both which relations are unmistakably part of the ‘all-embracing spirit of the cosmos’”<sup>21)</sup> それ故 Browning は恋人達に対して神秘的なある力が加わるのは当然だと考えたに違いない、と言う。

We two stood there with never a third,

But each by each, as each knew well:

The sights we saw and the sounds we heard,

The lights and the shades made up a spell

Till the trouble grew and stirred. (St. XXXVIII.)

つまり2人だけしかいないその世界に行んでいると、森の中の光と蔭が不思議なある魔力をかもし出した。2人は互にその気持ちがびったり通うが如く寄り添い、聞き耳を立て、辺りを見まわした。2人の愛する男女が大自然の神秘的な空間におかれた時の状態とその時に起る心理的影響を Browning は次の如く記す。

A moment after, and hands unseen

Were hanging the night around us fast;

But we knew that a bar was broken between

Life and life: we were mixed at last

In spite of the mortal screen. (St. XLVII.)

1 瞬の後、目に見えない神の手により夜の帳が下ろされ、2人は包まれてしまった。すると肉体の枷が取り除かれ、2人の魂は1つに融け合った。即ち Browning はその瞬間心の惑いを振り棄て、意を決し Elizabeth に結婚の申し込みをした。それを彼女も直ちに受諾したのであった。詩人は2人の恋を完成させたのは森であったと次のように断言する。

The forests had done it; there they stood;

We caught for a moment the powers at play:

They had mingled us so, for once and good;

Their work was done — we might go or stay,

They relapsed to their ancient mood. (St. XLVIII.)

森は2人に永遠の心の契りを結ばせ、大任を果たしたので、いにしえの静けさに戻って行ってしまった。彼は個々の人間のため、全宇宙が攝理に従って協力してくれているのに感謝感激し、“How the world is made for each of us!” (St. XLIX) と叫ぶ。ここまで回想をめぐらして来て、詩人は今傍にいる愛妻の上に思いを馳せる。もし自然が与えてくれたあの1瞬時になしたプロポーズを妻が平然と冷たく受け流したのだったら、自分は心おののき退散してしまっただろう。そして再び運命に挑戦することはなかったろう。併し彼は彼女の愛を勝ち得た。彼女は惜しみなく、充ちて余りあるやさしい愛情を、全幅の信頼をもって捧げてくれた。それ故、彼が言うように妻に対する感謝と愛情は絶対最高無比のものであることはいうまでもない。彼は “But you spared me this, (this は despair の意) like the heart you are, / And filled my empty heart at a word.” (St. XLVI.) と謝す。第五部は St. XLIX—LIII で短い。肌寒い人生の晩秋に足踏み入れた詩人は、炉辺に夫人と共にしみじみと過去の日々を振り返り、幸せだったと思う。そして第51連でその告白を次の如くする。

I am named and known by that moment' s feat;

There took my station and degree;

So grew my own small life complete,

As nature obtained her best of me——

One born to love you, sweet! (St. LI.)

かの1瞬時があつて以来、私の名声は上り、広く世界に知られるようになった。1人の婦人の愛を勝ち取ったことにより自分は1人前の男性として、1人の人格として完成するに至った。「愛するひとよ。私はあなたを愛するために生まれて来た。」と言ひ、更に“*So, earth has gained by one man the more, / And the gain of earth must be heaven's gain too;*” (St. LIII.) と誇り高くこの詩を閉じる。即ち「地球は自分という幸せ者の存在することによって得をした。これ即ち又天の益する所にちがいない。」と。つまり自分という個と、天と地は互に調和し、関係し合つて行くという想いを深くしている。この詩の中に鏤められた数々の妻に対する愛の言葉は永遠不滅の宝として残るであろうが、別の面でのこの詩について批判の声もあるので簡単に紹介しておきたい。

J. Fotheringham は“*By the Fireside*” is a little hard to read. Its hardness comes from its point of view and construction, and from the way in which story and description are worked in with and delay the main theme.”<sup>22)</sup>と、「炉辺にて」の難解な理由を指摘しているが、全くそのとおりで、うっかりすると、全篇の中にある「時」の流れの方向を見失つてしまひそうになる嫌がある。更に S. A. Brooke が言うように39連から46連までは全篇と余り関わりのないような議論を Browning 独特な手法で展開しているため、本筋から離れて脇道にそれる悪幣に陥っていることも免れない。そのため愛妻の美点をあげる手際の悪さもさることながら、折角高められた愛の追憶も、中断されてしまつている。Brooke の指摘する所を引用してみよう。

“Even in *By the Fireside*, when he is praising the wife whom he loved with all his soul, and recalling the moment of early passion while yet they

looked on one another and felt their souls embrace before they spoke — it is curious to find him deviating from the intensity of the recollection into a discussion of what might have been if she had not been what she was —”<sup>23</sup>

Browning は愛の詩を多く書いたが、自分個人に関する愛については Hind が “The happiness of his married life was too sacred a thing to made the subject of songs that all the world read”<sup>24</sup>と 言っているように公開すべきものでないと考えていた。しかし “One Word More”<sup>25</sup> だけは「妒辺にて」より更に全く歯に衣を着せず、夫人が彼にとってどんなに大切な貴重な存在であるかを衷心より吐露している。それには次のような理由がある。この詩は前述の如く *Men and Women* の Epilogue として London に 1 時帰国した時に書かれ、Browning が妻に献呈したものであるからである。To E. B. B. 1855 と夫人の頭文字と年号が題目の下に書かれ、終りには R. B. と自分の頭文字が記されているのを見ても、全く personal な詩であることがわかる。これは *Sonnets from the Portuguese* に対する Browning の応答と見なされている。Symons は Browning がこの詩の中に “has embalmed in immortal words the holiest and deepest emotion of his existence.”<sup>26</sup>と賞賛し、合せて夫人の *Sonnets* 集に言及し、次の如く高く評価している。“And, just as Mrs. Browning never wrote anything more perfect than the *Sonnets*, so Browning has never written anything more perfect than the answering lyric.”<sup>27</sup>

Browning は詩の冒頭に誠心溢れる言葉を連ねた。

There they are, my fifty men and women

Naming me the fifty poems finished!

Take them, Love, the book and me together:

Where the heart lies, let the brain lie also. (St. I)

これは有名な詩行で、詩人は妻に50人の男女の人格描写を中心に書きあげた50篇の詩と、この自分とを受け入れてほしいと願う。「Love」つまり夫人に彼は、



自分の心に平安を与えてくれるあなたの胸に、自分の頭脳の生み出した詩集をおいてほしいと言う。

Berdoe によれば “The dedication is happy, because his interest in men and women had been quickened and deepened by his marriage. They had studied human nature together, and each poetic soul had reacted upon the other.”<sup>68</sup> という風に Browning の珠玉の名詩集は夫人の精神的な影響力にあずかった所が多々あったといえよう。勿論詩人はそれを感謝している。だから Browning はこの愛妻に “something of his best, some gift which is not a gift to the world but to the woman he loves;”<sup>69</sup> を与えたいと願いこの Epilogue, “One Word More” を贈ったのである。Browning は人は誰しも恋人のため各その最高のものを贈物として捧げ、敬意を表し、喜ばせたく思う、がその贈物が世の人々にもうすでに知られているものであれば、それにはもう色々な価値判断がされ、その値打ちは半減すると考えていた。Sutherland Orr は Browning の考えを次の様に要約する。“Every artist, he declares, longs “once” and for “one only,” to utter himself in a language distinct from his art.”<sup>70</sup> と。

そこで Rafael も Browning と同じ考えのもとに、彼の恋人に100篇のソネット<sup>71</sup>を書きおくれた。その詩集を恋人 La Fornarina はどんな思いで受けたろうか。ともあれ人々は彼の絵画をみたが、彼の真の「心」に触れたのは詩集を貰った恋人1人だけであったかも知れないと Browning は羨ましく思う。

You and I would rather read that volume,

(Taken to his beating bosom by it)

Lean and list the bosom-beats of Rafael,

Would we not?” (St. III)

Browning は妻に、共に Rafael の高鳴る胸に寄り添い、その鼓動に耳を傾けながらその詩集を読めたらどんなに良いだろうと話しかける。しかし Rafael の死後友人 Guido Reni は詩集を大事に秘蔵していたが、その亡きあと

それは姿を消して跡形もない。("Suddenly, as rare things will, it vanished.") (l. 31)

かの詩聖 Dante も美少女 Beatrice のために不慣れな絵筆を取って、天使の絵を描こうと努力していた。ところが邪魔者が入って来て、彼に掴みかかろうとしたので描くのをやめてしまった、という。Browning は妻に又、私達は Dante の地獄篇 (Inferno) を読むより天使の絵の方が見たいね、と同意を求める。詩人 Dante が愛する少女のため畫家になろうとしたり、畫家である Rafael が詩を書こうとするのはなぜだろう。それは自分自身の卓越した天賦の才によらない他の分野に挑戦し、1 度だけ 1 人の恋人のため不慣れでも清く汚れない、真心を捧げたかったからであると Browning は思う。

大予言者 Moses がイスラエルの民を導いてエジプトを去る大いなる偉業をなそうとした時も、無知な群衆の嘲笑にあい、彼の天賦の力も地に落された。まさに "Heaven's gift takes earth's abatement!" (l. 73) と Browning はいいたい。しかし、Moses は常に群衆の面前では威厳と權威を持ち続け、予言者の体面を保たねばならなかった。彼は無知蒙昧な民に仕えるのではなく自分の愛する 1 人の女性に仕えることができるのなら彼は予言者の殻から抜け出し、そのひとのために他人にはわからない純粋な真の自分が示せるものを、と思う。彼は己が渴をいやすために胃袋の中に水を貯えていた駱駝が、砂漠の中で渴きのため 1 命を落そうとする主人のため、己が胸を裂かれるのをよしとする、その献身的な愛を羨む。(" He would envy yon dumb patient camel, / Keeping a reserve of scanty water / Meant to save his own life in the desert; / Ready in the desert to deliver / (Kneeling down to let his breast be opened) / Hoard and life together for his mistress." 11. 103-108) . Browning 夫妻はこの偉大な予言者の苦衷を慮る。

恋人のため Rafael が詩を書き、Dante が絵筆を取ったように Browning も妻のため詩以外の何かを捧げたく思うが、それ以外の才を持ち合わせていないので詩作による以外に道はない、と次のように謙虚に告白する。

I shall never, in the years remaining,

Paint you pictures, no, nor carve you statues,  
 Make you music that should all-express me;  
 So it seemes: I stand on my attainment.  
 This of verse alone, one life allows me;

Verse and nothing else have I to give you. (St. XII, 11. 109–114)

そして彼はすぐに妻に “Take these lines, look lovingly and nearly, / Lines I write the first time and the last time.” (11. 119–120) と弁明する。即ち彼は今彼が妻に捧げている詩集 *Men And Women* は大体登場人物による dramatic monologue 形式になっているのに反し、この Epilogue だけは詩人自身の口から真心と愛をもって直接妻に話しかける形式になっている。又詩型にしてもこの詩の場合以外には彼の用いない 1 世 1 代の不慣れな 5 stress trochaic 無韻詩という型を採用しているから、よく見てほしいと頼む。

Duffin はこの跋詩を 2 つの部分に分ける。即ち St. XIV の中で “Let me speak this once in my true person, / Not as Lippo, Roland or Andrea, / Though the fruit of speech be just this sentence: Pray you, look on these my men and women, / Take and keep my fifty poems finished; ...” という内容の所までが前半で、それに続く月の image の部分は後半部に属す、と指摘して、筆者が先に引用してある St. XII 以外について次の如く評している “I think the earlier part which embodies the ‘spceial art’ theme is on lower level. The idea is a charming one, but its working out is ‘amphibious’.”<sup>62)</sup> と。併し後半分については彼は “The sections XV—XVIII that work out this moon-figure are supremely beautiful,” と賞賛している。彼は更に後半部は前半分の足りない所を補って余りある程完璧である。だから読者は満足感を持ってこの詩をよむ、と言っている。 (“... the utter perfection of the second part wipes out all impression of earlier imperfection and leaves the reader satisfied and happy.”)<sup>63)</sup>

Browning はふとロンドンの窓辺より街の家並の上を渡り行く月の姿に目を留め、夫人の注意をそれにむける。“Lo, the moon’s self!” (1. 144) と。彼ら

はこの間 Florence を去る時、新月を眺めたが今 London でみる月は輝きを失い鈍い姿になってしまい同じでない。このように月にも異なった面があることを二人は静かにみとめる。それから Browning は月にまつわる話を思い出して話す。もし月の女神が地上の青年を恋したならば彼女は herdsman, huntsman, steersman 等々が誰れ 1 人として見たことのない月の片側の面をその青年に見せるであろう。(“ ... for if that moon could love a mortal, / Use, to charm him ... , / All her magic ... / She would turn a new side to her mortal, / Side unseen of herdsman, huntsman, steersman—”) St. XVI. 又その面がいかなるものであったか、それは他人には量り知るよしもない秘密に属する世界であった。それは恐いもの、或いは美しいもの、それとも不吉なもの、もしくは最高の神の姿を目のあたりにみるが如きものであったのかその青年以外には誰も知らない。“What were seen? None knows, none ever shall know. / Only this is sure— the sight were other, / Not the moon’s same side,” 丁度 Florence で見た月と London で見た月が異なるように。同様に神の造り給いし貧しき我々人間にも 2 つの面があたえられている。1 つは、世の人々に見せるための面、もう 1 つは愛する人にのみみせたい面である。神に感謝の外はない。(“God be thanked, the meanest of his creatures / Boasts two soul- sides, one to face the world with, / One to show a woman when he loves her!”) St. XVII. だから Raphael も Dante も Moses も他人にみせる 1 つの面と、他の誰にも見せない、最愛なる人にのみ捧げるための面を持って、それに心を傾けたのであった。

そこまで話しているうちに Browning は自分のことばかり話しているのに気づき妻の方に向き直る。以下の St. XVIII は“*One Word More*”の中の白眉であるとの呼び声が高い。愛するひとよ！ 私は自分のことばかり言って来たが、これはあなたにも当てはまることです。多くの詩人達が仰ぎみる私の月であるあなたよ！ 彼らはあなたが世間に見せるあなたの半分しかみていないのです。世の人々はあなたを見て、あなたの詩を読んで、あなたを崇め、理解していると思ひ込んでいる。それで私も彼等と一緒にあって、あなたを称えた。併

し私は言葉に出さずに心中静かに賛辞を送るべきだと考えている。それでも一番良い方法は彼らから離れて、忍び出で、輝やかな面から去り、裏面の微かな心もとなさそうな光の中に1, 2歩出て行くことである。そして夢想さえもしなかった、見たこともない静かな銀色の明暗の世界に直面する。それは私以外の誰もが見たことのないあなたの1面である。そんな時は感激と感謝で、私はひたすら無言のうちに己の幸を思う。詩の climax である XVIII 連の大意は大体以上の如くであるが、その原詩を次に引用しておく。

This I say of me, but think of you, Love!

This to you— yourself my moon of poets!

Ah, but that's the world's side, there's the wonder,

Thus they see you, praise you, think they know you!

There, in turn I stand with them and praise you—

Out of my own self, I dare to phrase it.

But the best is when I glide from out them,

Cross a step or two of dubious twilight,

Come out on the other side, the novel

Silent silver lights and darks undreamed of,

Where I hush and bless myself with silence. (St.XVIII.)

かくして Browning にとって月は妻のシンボルであるが、その愛妻が女流詩人としての公的な面を見せてくれたのみか、誰れにも見せなかった優しい献身的な愛情の溢れた妻としての面を披瀝してくれていることに、神の恩寵を忝なく思う。Browning も本来の自分以外の純粋な自分のものを、妻に捧げたいと思い、独特の手法をこらしてこの一篇の詩を書いた。それ故これを妻に受けてほしいと願うのは当然であろう。Browning は当時きつと、良き妻は神が与え給うた最高の賜物と、感謝の日々を送っていたに違いないと思う。以上で Browning 夫妻の間で捧げ合っていた愛の言葉の稿は終るが、筆者は Browning にならって「もう一言」one word more を加えて結論にしたい。

“Prospice”<sup>84)</sup>は Browning 夫人が亡くなった1861年の秋に書かれた Browning の傑作である。これはラテン語の “look forward” つまり「前方を望め」という意味である。この詩は我々すべての人間に与えられている死、に向かっての勇敢な挑戦状である。彼が恐ろしい死との決戦をものともしないのは、戦が終れば、その嵐の後には平和の光が前方に見え、永遠なる世界に入ることが許されると、確信していたからである。彼は力強くその信念の程を次の如くうたう。

“ ... first a peace out of pain,  
Then a light, then thy breast,  
O thou soul of my soul! I shall clasp thee again,  
And with God be the rest!”<sup>85)</sup>

何と素晴らしい心境であろうか。まさに Browning の面目が躍如としている結語といえよう。S. Orr はこの詩について “We cannot doubt that this poem, like the preceding (“One word More” を指す) came from the depths of the poet’s own heart.”<sup>86)</sup> というように、前の詩と同様に詩人の誠心から溢れ出た亡き夫人への追慕の情をそのまま伝えたものと考えてよい。彼は自分の死に思いを致す時、死を通してこそ夫人との再会が可能であると確信していたのでおそれることはなかった。夫人も又前述の *Sonnets from the Portuguese* の中で “I shall but love thee better after death” (詩43) (「死んで後までもなお一層深く愛し続けます。’)と誓っている。この世に存命中は勿論のこと死して後までも、その愛を貫き、信じ、高め、強めて行くことを誓い合えた2人の純愛は、後世までも語り伝えられることは当然であると思われる。

〔註〕

- (1) V. E. Stack (Selected and with an Introduction by); *The Love - Letters of Robert Browning and Elizabeth Barrett*, (William Heinemann, Ltd., London, 1969) p. 1.
- (2) *Ibid.*, p. 2.

- (3) *Ibid.* , p. 4.
- (4) *Ibid.* , p. xiii.
- (5) *Ibid.* , p. 8.
- (6) W. Hall Griffin and H. C. Minchin; *The Life Of Robert Browning*, (Methuen & Co. Ltd. London, 1938) p. 148.
- (7) V. E. Stack, *op. cit.* , p. xxii. Stackによれば多くの手紙のうちこの手紙だけは後日 Elizabeth の依頼により破棄されて残っていないとのことである。
- (8) V. E. Stack, *op. cit.* , p. 19.
- (9) *Ibid.* , p. xxiii.
- (10) Maisie Ward ; *Robert Browning And His World : The Private Face* (Holt, Rinehart and Winston, Ltd. , New York,1967) p. 118.
- (11) Frederick A. Mayer, (Illustrated by) ; Elizabeth Barrett Browning, *Sonnets From the Portuguese*, (Illustrated Editions Company, New York, 1937)
- (12) Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia* (George Allen & Unwin Ltd. London, 1931) p. 282.
- (13) F. G. Kenyon, (With introductions by) ; *The Works Of Robert Browning*, Vol. 3, (Ams Press, Inc. , New York, 1966)p. 200.
- (14) *Ibid.* , Vol. 5, p. 45, 1. 1391. その外余談になるが F. Locker Lampson が夫人の手と小鳥の足の image を重ねて描いているのが面白いので紹介しておく。“ ... poor little hands — so thin that when she welcomed you she gave you something like the foot of a young bird.” (Charles Wells Moulton, edited by; *The Library of Literary Criticism; English and American Authors, Vol. VI, 1855–1874*; Peter Smith, Gloucester, Mass. , 1959.) p. 324
- (15) Henry Charles Duffin; *Amphibian, A Reconsideration of Browning* (Bowes & Bowes, London, 1956)p. 89.
- (16) W. Arthur Hind; *Browning' s Teaching on Faith, Life and Love*, (George Allen & Co. , Ltd, London, 1912)p. 83.

- (17) William Clyde DeVane; *A Browning Handbook* (F. S. Crofts & Co. New York, 1935)p. 198.
- (18) F. G. Kenyon, *op. cit.* , "By The Fire-Side," Vol. 3, p. 202. (この詩は同巻pp.202 ~211に記載されている。)
- (19) W. Arthur Hind, *op. cit.* , p. 87.
- (20) F. G. Kenyon, *op. cit.* , "Rabbi Ben Ezra" , Vol. 4, p. 261.
- (21) H. C. Duffin, *op. cit.* , p. 202.
- (22) James Fotheringham; *Studies of the Mind and Art of Robert Browning* (Horace Marshall & Son, London, 1900) p. 496.
- (23) Stopford A. Brooke; *Poetry of Robert Browning* (Thomas Y. Crowell Co. , N. Y. , 1902) p. 245.
- (24) W. Arthur Hind, *op. cit.* , p. 82.
- (25) F. G. Kenyon, *op. cit.* , "One Word More" Vol. 4. pp. 173-80.
- (26) Arthur Symons; *An Introduction to the Study of Browning* (J. M. Dent & Sons Ltd. , London, 1923) p. 126.
- (27) *Ibid.* , p. 126.
- (28) Edward Berdoe, *op. cit.* , p. 295.
- (29) *Ibid.* , p.295.
- (30) Sutherland Orr; *A Handbook To The Works Of Robert Browning* (G. Bell & Sons, Ltd. , London, 1927) p. 220.
- (31) W. Arthur Hind, *op. cit.* , p. 92. " hundred sonnets " について Hind は脚注に "Here, and in some other statements in this poem we must make a little allowance for a poetic licence that Browning rarely used " と注意を促している。
- (32) H. C. Duffin, *op. cit.* , p. 95.
- (33) *Ibid.* , p.96.
- (34) F. G. Kenyon, *op. cit.* , "Prospice", Vol. 4, p. 306.
- (35) *Ibid.* , p. 306.



③6) Sutherland Orr, *op. cit.*, p. 221.

脚注記入以外の参考書

1. 石川林四郎; *Select Poems of Robert Browning* (研究社, 英文学叢書, 研究社. 1925.)

2. 石川憲次 } 註釈 *Men And Women* Vol. I  
石川林四郎 }

研究社英米文学叢書111 (研究社出版, 昭和38年発行)

3. 同上 *Men And Women* Vol. II

叢書112 (研究社出版, 昭和36年発行)

4. 大庭千尋; 「ブラウニング・男と女」訳 (国文社, 1975.)